

26. 学校教育における防災

これまでも総合学習などを活用して防災教育をしてきています。その内容は多岐に割っていて、ゲーム、防災マップ作り、地域研究、災害事例や知識の伝達などです。そのような学習した結果が防災への関心ごとにつながって継続していくことを期待しています。少なくとも、何らかの動機づけとなって、他地域での災害などを参考に、知識を深め、いかにすれば災害を最小にできるか、周りの人とのコミュニケーションを図っていくきっかけになれば十分だと思います。

しかし、防災だからと言って、災害の話から入っていくということは当然のようにも思えるのですが、幾分疑問も感じています。自然災害は自然現象が素因と相まって起きることなのですが、その自然現象は決して負の面ばかりではなく、むしろ恩恵の方が大きいことに気づく必要があると思います。一方、自然の異変が起こすことで、私たちの生活環境へ不都合を発生させてしまっているのは生活環境それ自体がそのような状況を誘導しているという面もあります。

そこで、学校教育においては、防災ということで恐怖や嫌悪、敵視あるいは対抗心というのを前面にするのではなくて、その反対に自然と人間との関係、自然と共生する暮らし方をテーマとする視点を切り口にして、自然現象との付き合い方を学習するという方法を提案します。災害というと、これまでの事例の異常な迫力ある動画や写真を見せて、いかに対応すべきか、自助、共助、公助の大切さとか強靱化などを主たるテーマにするのは効果的でないような気がします。

つまり、恵みを享受する中でも、時に自然が起こす不都合なことに対して、どのように対応すべきか、不都合なことを最小限にとどめることができるのかという基本的な視点を防災の柱にしていくということです。しかし、そこには暮らすという厳然たることがあるわけで、自然現象との付き合い方やマナーを身に着けるといことになるような気がします。そこから、対応としてハード対策の限界も見えてくるしソフト対策も自然現象の挙動と同調できるような方法も案出できるのではないのでしょうか。

私たちは、決して自然との共生を忘れたわけではないのですが、少し目の前のことに行き過ぎて、あるいは自然の挙動を無視してきたようなことで少々傲慢になったというか甘えてしまったのかもしれない。合理的とか利便性、機能的ということで、自然を無視した開発や改修、改善といった一方的な視点で踏み込みすぎたようにも見えます。そのことに気づいてSDGsにも取り組み始めていますが、そのテーマは防災にも通じることです。防災教育とか防災学習のこれまでの発想の転換を図って、切り口を変えていくこともあるのかなと考えているところです。